「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組
「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～山口県～

○都道府県の課題とその分析

小 学 校：先行実施の奨励と移行措置の確実な実施により、教科化・早期化に伴う教員の指導力や児童の英語によるコミュニケーション能力を向上させていくこと。
中 学 校：授業中における生徒の英語による言語活動を充実させることで、求められる英語力を有する生徒の割合を増加させていくこと。
高等学校:授業における英語担当教員の英語使用状況の改善及び生徒の英語による言語活動の充実を通じて、求められる英語力を有する生徒の割合を増加させていくこと。

○課題解決のための具体的な対策

山口県の英語教育推進計画(H26～H30)

英語によるコミュニケーション能力を養い、グローバル化に対応した人材の育成を強化するため、外部専門機関と連携した効果的な研修を通して、英語教育担当者の指導力を向上する。

外部専門機関と連携した英語指導力向上事業

小中高連携英語教育推進校・連携校 研修協力校の指定

推進校(高:7校、中:7校)・連携校(小:19校)
○公開授業、研修会を通した校種間連携
○推進校・連携校連絡協議会の開催
・外部講師による校種間連携に関する講演
・先進校の取組発表
・推進校・連携校の代表者による情報交換・協議

研修協力校(高:1校、中:2校、小:3校)
○公開授業や研究協議の実施(先進的な授業実践)
○定期的な校内研修
○外部講師による指導助言

外国語教育強化拠点事業～H29

光市立室積小・中学校、県立光高等学校
○新しい英語教育の実現に向け、教育課程や指導方法を開発

英語教育推進教員の配置

高:3名、中:7人、小:14人
○配置地域内の小・中学校での授業提供や 授業改善への指導・助言
○リーダー養成研修会(中央研修)への参加

小:英語専科教員の配置

指導力向上研修会

◎高等学校英語教員指導力向上研修会
H30まで、高等学校教員対象に毎年全4日間(全英語教員が受講)
◎中学校英語教育指導力向上研修会
H30まで、中学校教員対象に毎年全4日間(全英語教員が受講)
◎小学校英語教育中核教員養成研修会
H30まで、小学校教員対象に毎年全4日間(600人の英語教育中核教員を養成)

成果の波及・周知

・ 研修協力校や小中高連携英語教育推進校・連携校における、日常的な校内研修や授業改善の成果については、県全体に公開している授業研究会等で共有し、参加者の指導力向上を図ることができた。
・授業研究会に、外部講師による指導・助言を取り入れることなどにより、新学習指導要領や国の動向について周知することができた。また、県担当者が好事例を把握し、様々な機会に情報発信をすることができた。

・H30 県内外国語教育に係る研修会実施回数・参加者数
(小:70回 2,300人 中:50回 783人 高:13回478人)
・H30 県内ALTの研修会参加者数(合計291人)
・H29～31 教育課程説明会の開催
・「学習指導要領の手引き」の作成(ウェブページアドレス)
http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50900/sidouyouryou/tebiki.html

成果と課題

＜成果＞
・研修協力校や小中高連携英語教育連携校・推進校における英語教育推進リーダーを中心とした組織的な授業改善の促進
・他校種の授業参観等による小中高連携英語教育の充実
・生徒の英語力の向上
(H30中:研修協力校 合計値48.1%)県平均38.3%
(H30高:研修協力校 合計値62.6%)県平均38.3%
・生徒の英語力は本事業実施5年間で、中・高等学校ともに、それぞれ11.3%、6.5%上昇
＜課題＞・国が求めている50%への到達

問題解決のための手立て

・小学校では、移行措置の確実な実施とともに、英語教育推進リーダーや中核教員による採択教科書の教材研究や学習到達度目標の作成を推進する。
・中・高等学校では、国や県市町の各種研修会を通じた教師の英語力向上とともに、授業中の「即興的なやり取り」や「言語活動の充実」による、生徒の英語による発信力強化を推進する。
・指導と評価の一体化を推進するために、新学習指導要領における評価の在り方について研修会等を通じて周知する。
・新学習指導要領の趣旨に応じた実践事例の作成を予定。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～下関市立豊浦小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

【課題】担任による外国語活動の授業づくり
【課題解決の手立て】T1（担任）とT2（ALT）の役割を明確にする。

具体の取組の内容

1. T1（担任）の役割
   ①指導内容の精選と指導案・教材の作成をする。
   ②司会・進行役として授業を進める。（日本語でよい。）
   ③クラスルームマネージメントを行う。
   ④外国語学習者として、よき手本となる。
   ⑤日本語と英語の違いについて児童に気付かせたり、補足したりする。 等

2. T2（ALT）の役割
   ①児童の発音を聞き取り、正しい発音を指導する。
   ②母国の紹介を中心に、外国語文化を紹介する。
   ③口頭練習を行う。
   ④活動のアイディアを出したり、主導したりする。
   ⑤児童が積極的に英語を使おうとするように、サポートする。等

3. 指導案のパターン化⇒1時間の指導の流れ（挨拶→帯活動→展開→振り返り）

4. 展開のパターン化⇒単語の導入→練習→活動→キーセンテンスの導入→練習→活動

成果①

〇教員アンケート結果より

＊対象：本校3～6年学級担任19名
＊時期：2学期末

・T1授業に抵抗がなくなってきた。
　⇒95%
・指導案をパターン化することで指導がしやすくなった。
　⇒100%
・教師がクラスルーム・イングリッシュを使っている。
　⇒84%

成果②

〇担任の声より
・児童が日常生活の中で英語を使うようになった。
・自信をもって発音したり、英語を使おうとしたりする児童が増えた。
・英語を話すことや聞くことに抵抗がなくなった。
・「書く」ことに関してより積極的になった。（6年）

今後の課題・方向性

【英語あふれる授業に向けて】
・T1（担任）が少しずつクラスルーム・イングリッシュを活用する。
・児童に使わせたいクラスルーム・イングリッシュを、どの担任も徹底して使わせるように共通理解する。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～防府市立小野小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

・【課　題】友達との関わりを大切にした、互いの考えや気持ちを伝え合う体験的な言語活動の開発と実践
・【手立て】「他教科とのつながり」「必然性のある場面設定」「相手意識（やりとり）」を重視した授業づくり

具体の取組の内容

取組① Small Talk
話し手が話したくなる、聞き手が聞きたくなる

取組② アレンジ Chants
学習言語を自分の考えや気持ちに近付ける

その他の取組

〇デモンストレーション：　児童自身ができるようになることをめざし、提示の仕方や流れを工夫したり、聞いたり話したりする必然性のある場面設定をしたりすることで意欲を喚起する。

〇「書く」指導：　書くことや文字への慣れ親しみをめざし、毎時間の振り返り時間に設定する。5年生は1語、6年生は1文を4線上に書き写す。

成果①

【児童】
・英語表現が分からないときにジェスチャーをつけて何とか伝えようとしたり、うなずいたり問い返したりしながら聞こうとしたりする姿が見られるようになった。聞いて分かる、話して伝わる体験を積み重ねたことが、友達と関わることの心地よさを味わわせ、コミュニケーションに対する意欲を喚起したと言える。
・アルファベットの「音」を意識しながら、4線上に正確に文字を書き写すことができるようになった。

成果②

【教諭】
・友達との関わりの中で英語を学ばせたい、互いの考えや気持ちを伝え合う体験をさせたい、という願いが明確になった。
・教科横断的な視点をもつことで、伝えたくなる教材選択や場面設定ができるようになった。
・慣れ親しんだ表現であれば、書くことへの抵抗感や負担感を軽減したり払拭したりすることが分かり、外国語活動における音の指導の大切さを実感することができた。

今後の課題・方向性

　新教材では語彙数が大幅に増加される。そこで膨大な量の新出語句を、児童が主体的に学習できるよう、新出語句との出会わせ方や練習方法に工夫と改善が求められている。
　本事業を通して、本校が重視してきた三つの視点は、この課題解決に有効であると考える。児童が、「自分の考えや気持ちを伝えるためには必要だ」と必然性を感じたり、心地よい人間関係の中で「伝えたい」という意欲を湧かしたりする語彙であれば、児童は主体的に学びに向かうからである。そのような言語活動の開発と指導力向上に向け、さらなる研鑽を積んでいきたい。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～長門市立深川小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

現在、高学年においては、授業の組み立て、教材の作成、クラスルーム・イングリッシュの活用、指導案の作成等、少人数指導教員が主として行っている。今後、これらの作業を担任が行えるようになると良いと考えている。中学年においては、担任がT1として授業をリードしていくことを意識しているものの、T2との打ち合わせが不十分であり、スムーズにコミュニケーションを図りながら進行することに困難さを感じている。また十分なクラスルーム・イングリッシュの実践ができていないことも課題となっている。そこで、以下のような授業相互参観や研修を通して、授業力や英語力向上が図れるよう、随時働きかけを行っている。

具体の取組の内容

◆【授業公開❶】 T1:少人数指導教員　T2:英語教育推進教員　T3:担任

〇11月９日（金） ６年３組 『We Can! 1』Unit 9 Who is your hero? あこがれの人

・スモールトーク（Who am I?クイズ） ・チャンツ ・「マイヒーロー」の紹介 ・ストーリータイム(British Council)

【指導講話】 指導者　山口大学教育学部　准教授　猫田　和明　様

◆【授業公開❷】 T1:英語教育推進教員　T2:ALT　毎月１回　中学年において授業実践

◆【校内研修会の実施】

〇職員会議前5分間の教職員のイングリッシュレッスン　〇新学習指導要領の学習内容を踏まえた放課後研修会

〇校内研修会における英語研修　等

※教職員全員で共通理解・実践していること

〇授業時の共通あいさつ　〇絵本、チャンツ、ジングルや歌の積極的活用　〇「読む・書く」活動の導入（高学年）

〇英語コーナー設置と教材活用　〇ALTとの人間関係づくり（給食時間の会食等）

６年（マイヒーロー紹介風景）

成果①

〇アンケート結果（抽出学級）によると外国語活動は「好き、まあまあ好き」の割合が6年:93%、5年:88%、4年:100%、3年:100%の数値を示している。また「よく分かる、分かる」の割合についても6年:92%、5年:96%、4年:100%、3年:89%と全般的に肯定的に答えている。特に「ゲーム、歌・チャンツ」や「外国のことを知る」「友達と話す」「絵本の読み聞かせ」の活動に関心が高い傾向である。

〇毎週来校するALTに積極的に話しかけようとする児童が、高学年は57%、中学年は80%を占めており、英語を使えるようになりたいという思いは強い。

成果②

〇担任教師はT1としての意識が高まり、担任ならではの働きかけや見取りをしながら進行している。また、ALTとのよい関係を築きながら、TTが機能し始めてきた。

〇児童は英語を話したり聞いたりする活動に元来関心が高かったが、教師とのやりとりや楽しい活動を通して、さらにコミュニケーション活動に意欲的になってきている。教室外においても英語を使用する場面が増加傾向にあり、高学年では、家庭学習で文字を書く練習をしたり、英文を読もうとしたりする児童がいる。

今後の課題・方向性

〇担任がT1としての意識は高まったものの、授業づくりのスキルやクラスルーム・イングリッシュの活用については課題である。教師が一人でも自信をもち進行できる授業力や英語力を向上させるため研鑽を積むと同時に、教師間で一貫・継続して指導に当たる必要性を強く感じている。

〇高学年においては、中学校とのなめらかな接続を意識し、スモールステップ、そしてスパイラルに児童に英語力を身に付けさせていかなければならない。教師は小中相互の学習指導内容を理解し「英語が好き、分かる」「誰とでも関係を築くことができる」児童を育成していかなければならない。また、評価については、今後の国の動向を鑑み、研修を一層重ねていきたいと考えている。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～下関市立勝山中学校～

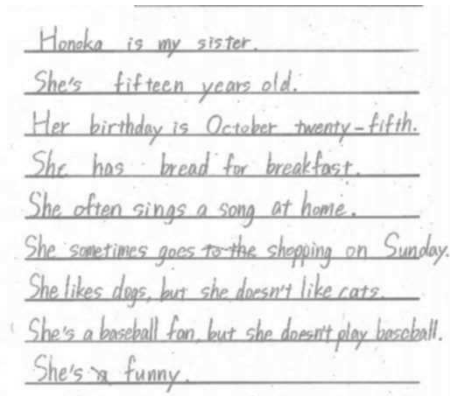
現状の課題と課題解決のための手立て

・進んで英語で表現しようとする生徒の育成～パフォーマンステストの研究と工夫を通して～
・小学校外国語活動から中学校英語科へのスムーズな移行～帯活動の研究と工夫を通して～

具体の取組の内容

・学期に1回パフォーマンステスト（スピーキングとライティング）を実施。
スピーキングテスト・・・日ごろペアで行っている40秒会話をALTと行う。その後でALTが英文が書かれたカードを渡す。その内容について三つ質問するので、それに答える。
ライティングテスト・・・授業で習ったことを題材にする。例えば1年生では、1学期は「自己紹介文」2学期は「他人紹介文」（右ワークシート画像参照）3学期は「自分の一日」を15分間で書く。

・小学校3年生から6年生まで帯活動を実施。
全ての学年で①英語ルール②あいさつ（曜日や天気等を含む）③数字④Q＆A⑤アルファベット⑥フォニックス（5，6年のみ）を行う。学年が上がるにつれて積み重ねとレベルアップした内容にする。
中学校1年生でも帯活動を実施。①あいさつ②Q＆A③40秒会話④数字⑤フォニックス（④⑤はALTとのTTのみ）を行う。


Honoka is my sister.
She's fifteen years old.
Her birthday is October twenty-fifth.
She has bread for breakfast.
She often sings a song at home.
She sometimes goes to the shopping on Sunday.
She likes dogs, but she doesn't like cats.
She's a baseball fan, but she doesn't play baseball.
She's a funny.

成果①

〈アンケート結果から〉中1対象（11月実施）
小学校からのスムーズな移行を意識して、スピーキング活動を中心とした授業づくりを行っているため、Q＆Aや40秒スピーチが好きだと答えた生徒が多く、英語で話すことに意欲的に取り組んでいる。「授業中、進んで英語を話すことが楽しいか」との質問に64％の生徒が楽しいと感じている。パフォーマンステストでもその成果が出ており、全員がALTと英語で会話ができている。

〈英検受検者及び合格者の増加〉
・平成30年度　英検受検者　98名
（昨年度より20名程度の増加）
・平成30年度　3級以上取得者　35名
（昨年度より10名程度の増加）
※校内受検者のみ

成果②

〈10月公開授業を参観された教職員へのアンケートから〉
・帯活動により小学校からのスムーズなつながりを感じた。小学校と同様で、中学校でも生徒全員がコミュニケーション活動に参加しているところがすばらしい。相づちやアイコンタクトなど聞く姿勢もよい。
・帯活動が段階的にレベルアップされて継続されていることが小中を繋いでいると思われる。
・各教員の継続した指導によってコミュニケーション活動で40秒間会話を続けることができるようになった。
・児童生徒が自信をもって英語を使っている。「I'm finished.」「Could you check my English?」などクラスルーム英語を積極的に使っていた。
※帯活動に係る校内研修→市内4小学校で実施
※小中合同研修会→夏季休業中に1回実施
※小学校での乗り入れ授業→T2として毎時間TT

今後の課題・方向性

アンケート結果から多くの生徒は「書くこと」を苦手としている。また、伸ばしたい技能も「書くこと」である。そこで、「書けるようになる」ための指導として、小学校6年生でフォニックスを導入し、文字がもっている音を確認した。また、中学校でも引き続きALTとの授業でフォニックス学習を続けた。この結果「読むこと」を得意とする生徒は多くなったが、「書くこと」にはつながっていないのが現状である。パフォーマンステストでは、10名程度が全く英語で表現することができなかった。11月の全英連滋賀大会では「書くこと」についての分科会に参加し、単語練習や基本文のドリル学習などインプットと慣れが必要であること、また4分割ワークシートを活用することによって、自分が書いたことを振り返ることができ、だんだん書けるようになっていることに喜びを感じられることを学んだ。ぜひ来年度から取り入れていきたい。
今年度小中連携を意識して、1年生を中心に研修を行ってきた。今後の目標は、2年生、3年生においてもパフォーマンステストや帯活動などの充実を担当教員と一緒に研修していく必要がある。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～柳井市立柳井中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

・授業の「見える化」のための授業スタイル・デザインの構築
（めあて・流れの明示、振り返りシートなどワークシートの工夫）
・生徒の発信力を育成するための帯学習と即興的な力を測るパフォーマンステストの計画的・段階的な実施

具体の取組の内容

・生徒に見通しをもたせるために、「授業のめあて、流れの明示、振り返りシート」の活用（市内小中学校で連携）
・生徒主体の学習をさせていくために、即興性に繋がる帯活動の充実と目的のあるペア・グループ学習の活用
・会話の即興性に繋げていくため「書いたもの」を読むのではなく、会話教材などでアウトプットを重視したペアスキットのための会話練習やテストの実施
・生徒の発信力と即興性の育成のために、各学年で計画的・段階的に学期１回以上パフォーマンステストの実施。
・ALTが面接官として参加のＣａｎ－ｄｏリストにも明示してあるパフォーマンステストの実施
・研修主題・副題として相手を大切にして「聞くこと」を掲げており、授業での生徒の品格育成と生徒の興味・関心を惹き付け集中させる導入の工夫　※絵・写真・動画・文字をICT機器などを利用して提示
・小学校専科・推進教員と月１回の定例で情報交換で連携して、「授業のめあて、流れの明示、振り返りシート」の活用指導案検討などを共通で実施

成果①

①意識調査の分析
毎学期生徒の授業アンケートを実施している。その中で他教科に比べて「発表力」と「コミュニケーション」が１学期から上位の数値を得ていたクラスが多かった。

②外部試験３回を活用
毎年１回実施を今年度は３回実施
Ｈ２８年度　２６名
Ｈ２９年度　６１名
Ｈ３０年度１７０名程度
（３回目予測含む）
３級受験者の増加から「聞くこと」「話すこと」への意識向上があった。

成果②

①評価レベルの明示
パフォーマンステストへの取組が改善された。全体の場での「評価」「発表」でない場合は特にストレス度が下り、適切な声量と緊張感で、生徒の取組の姿勢が改善傾向になった。

②振り返りシートの活用
発表回数などが記入されるので意識して主体的に授業参加する生徒が増加した。生徒の意見を参考にして前時の復習や教員の指導の改善に利用している。

今後の課題・方向性

①**授業デザインの明確化を授業のめあて、流れの明示、振り返りシートの活用**で図り、より生徒が「できるようになった」という自信をもって授業に取り組める語学教育の環境・授業づくりに取り組む。
②計画的で**段階的な帯学習を実施**して、生徒の即興性に繋がる「知識・技能」の具現化である「発信力」育成をする。
③**CAN-DOリストに明示したパフォーマンステスト**を各学年・校種間で連携して取り組み、即興性のある「発信」の機会を確保し、よりグローバルな視点・コミュニケーション能力を育成していきたい。

平成27～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～山口県立華陵高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

○ 社会的な話題に関する知識不足により、言語活動の深まりに課題 ⇒ 全校的な授業改善に向けた取組の充実
○ 自己表現（話すこと、書くこと）における論理性や正確性に課題 ⇒ 個別指導の一層の充実

具体の取組の内容

○ 各教科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善及び教科間連携の推進
- 他教科の授業において、話合い活動等を通して社会的な話題等に関する理解を促進
- 社会的な話題を扱う英語の授業において、生徒同士が多様な視点から意見交換する時間を確保
  ＜例＞ 「現代社会」の授業で尊厳死についてディスカッションをした後、「英語表現」で尊厳死に関する
  ディベートを実施（英語科）

○自己表現に係る指導の充実
- 外部講師による生徒対象のディベートに係るワークショップを実施（英語科）
  ＜例＞ 情報収集や整理の方法、論理的な文章の書き方等
- 授業中に生徒が書いた英作文を個別に添削指導（普通科・英語科）

成果①

高校3年生の英検準2級以上取得者割合の上昇

	普通科	英語科
H27年度末	18%	62%
H28年度末	27%	88%
H29年度末	31%	83%
H30年11月	30%	89%

成果②

平成28年度入学生の英語力の向上
（学校独自語彙力テストによる調査）
＜英検2級レベルの語彙テストで70%以上の生徒の割合＞

	普通科	英語科
H28.5（1年次）	0%	0%
H29.5（2年次）	3%	5%
H30.5（3年次）	23%	54%

今後の課題・方向性

＜課題＞
○ 他教科と連携した、社会的な話題等に関する知識量の向上
○ 自己表現における論理性及び正確性の更なる向上
○ 研修協力校指定以前から進んでいる授業改善のノウハウの組織的継承

＜方向性＞
○ 教科間連携の一層の推進
○ 個別指導の充実
○ 英語科教員の相互授業参観等を通じた授業に係るノウハウの継承